

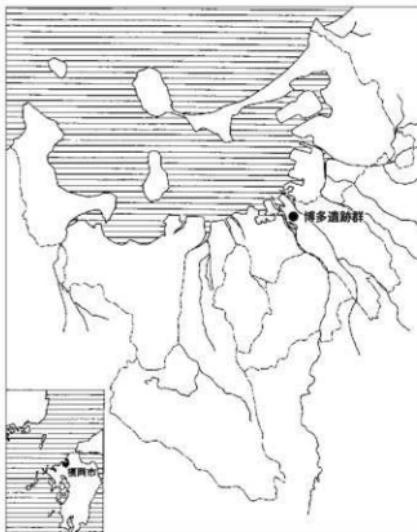
HAKATA
博多 177

— 博多遺跡群第230次調査報告 —

2021
福岡市教育委員会

HAKATA
博多 177

— 博多遺跡群第230次調査報告 —



遺跡略号 HKT-230

調査番号 1911

2021
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書はホテル建設に伴い、博多区上呉服町地内で実施した博多遺跡群第230次調査の成果を収めるものです。

今回の調査では、中世の井戸、土坑、溝、柱穴などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社ジップ様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和3年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　言

1. 本書はホテル建設に伴い、福岡市博多区上呉服町地内において実施した博多遺跡群第230次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 井戸 SE 土坑 SK その他 SX
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測は山崎龍雄、山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下が行った。
6. 製図は山崎龍雄、山崎賀代子、木下が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収藏・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下が行った。

調査番号 1911	遺跡略号 HKT-230	分布地図番号 048 千代・博多
所在地 博多区上呉服町170、171		調査面積 100.0m ²
調査期間 20190522 ~ 20190810		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	1
第3章 調査の記録	4
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	5
第1面	5
第2面	11
第3面	16
第4面	21
包含層出土遺物	23
3 まとめ	27
図版1～8	28～35

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)	3
図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)	3
図4 1区北壁土層断面図 (S = 1 / 40)	4
図5 第1面平面図 (S = 1 / 100)	5
図6 第1面検出遺構実測図 (S = 1 / 40)	7
図7 第1面検出遺構出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)	8
図8 第1面検出遺構出土遺物実測図2 (S = 1 / 3)	9
図9 第1面検出遺構出土遺物実測図3 (金属・石・土製品) (S = 1 / 2、1 / 1)	10
図10 第2面平面図 (S = 1 / 100)	12
図11 第2面検出遺構実測図 (S = 1 / 40)	13
図12 第2面検出遺構出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)	14
図13 第2面検出遺構出土遺物実測図2 (石製品) (S = 1 / 2)	15
図14 第3面平面図 (S = 1 / 100)	16
図15 第3面検出遺構実測図 (S = 1 / 40)	18
図16 第3面検出遺構出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)	19
図17 第3面検出遺構出土遺物実測図2 (ガラス・石・土製品) (S = 1 / 2、1 / 1)	20
図18 第4面平面図 (S = 1 / 100)	21
図19 第4面検出遺構および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3、1 / 2)	22
図20 包含層出土遺物実測図1 (S = 1 / 3、1 / 2)	24
図21 包含層出土遺物実測図2 (S = 1 / 3)	25
図22 包含層出土遺物実測図3 (石製品・土製品) (S = 1 / 2)	26

図版目次

- 図版1 2区北壁土層断面（南東から） 1区北壁土層断面（南東から） 1区東壁土層断面（南西から）
1区南壁土層断面（北西から） 1区第1面全景（北から） 2区第1面全景（南西から）
SK01・04（北東から） SK02（北東から）
- 図版2 SK05（南東から） SK06（南西から）
SK07（北西から） SK09（北東から）
SK10（南東から） SX11・12（北西から）
SE41（南西から） SK42（北西から）
- 図版3 1区第2面全景（北から） 2区第2面全景（北から）
SK13（西から） SK15（北東から）
SK19（南東から） SK40（北から）
SK40骨出土状況（北西から） 同左（北東から）
- 図版4 SK44（北から） 1区第2面下 青磁楕出土状況（北西から）
1区第3面全景（北から） 2区第3面全景（北から） SK28（北東から）
SK29（北東から） SK30・35（南西から）
SK32（北東から）
- 図版5 SX34（南西から） SK39（北西から）
SK47および下面SK53検出状況（南西から）
SK48（南西から） SK49（北東から） 同左 完掘状況
SK50（東から） SK51（南西から）
- 図版6 1区第4面全景（北から） 2区第4面全景（北から）
SK31（北西から） SK33（北西から）
SK53（北東から） SK55（北西から）
SD54（南西から）
- 図版7 出土遺物1
- 図版8 出土遺物2

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成30（2018）年11月7日付で、株式会社ジップより福岡市博多区上呉服町170、171地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号30-2-766）。同地内は博多遺跡群の範囲内であることから、同年11月28日に確認調査を実施し、現地表面下140cmで遺構を確認した。

今回はホテル建設が計画されており、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成31（2019）年4月下旬にバックホウによる表土掘取りおよびH鋼と鋼板による土留めを実施した後、着手した。令和元（2019）年5月22日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、同年8月10日に終了した。

2 調査体制

調査委託 株式会社ジップ

調査主体 福岡市教育委員会

（発掘調査 令和元年度 資料整理 令和2年度）

調査総括 経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課長 菅波 正人（令和元・2年度）

同課調査第1係長 吉武 学（令和元・2年度）

庶務 文化財活用課管理調整係 松原 加奈枝（令和元・2年度）

事前審査 埋蔵文化財課事前審査係長 本田 浩二郎（令和元・2年度）

同課事前審査係主任文化財主事 田上 勇一郎（令和元・2年度）

同課事前審査係 朝岡 俊也（令和元年度）

山本 晃平（令和2年度）

調査担当 埋蔵文化財課調査第1係 木下 博文

第2章 遺跡の立地と環境

博多遺跡群は博多湾に面し、那珂川と御笠川に挟まれた3列の砂丘上に展開する弥生～近世に至る複合遺跡である。3列の砂丘の内、現在の呉服町交差点付近を境に博多湾寄りを息浜（おきのはま）、内陸の2列を博多浜と呼称している。現状はJR博多駅から真っすぐ海側に向かって伸びる大博通りを中心とし、高層のマンション・ビルが立ち並ぶ中、古くからの町割りが残る区域となっている。

今回の調査地点は、遺跡の中央部北寄り、呉服町交差点から東へ約280mの上呉服町地区に位置する。調査地点前を走る御供所通り沿いに南東へ向かうと鎌倉時代初頭に開創された国史跡聖福寺の正門に至る。調査地点の近隣はこの聖福寺に伴って中世に形成された寺中町の範囲に含まれており、近世には金屋小路と呼ばれた町屋域にあたる。

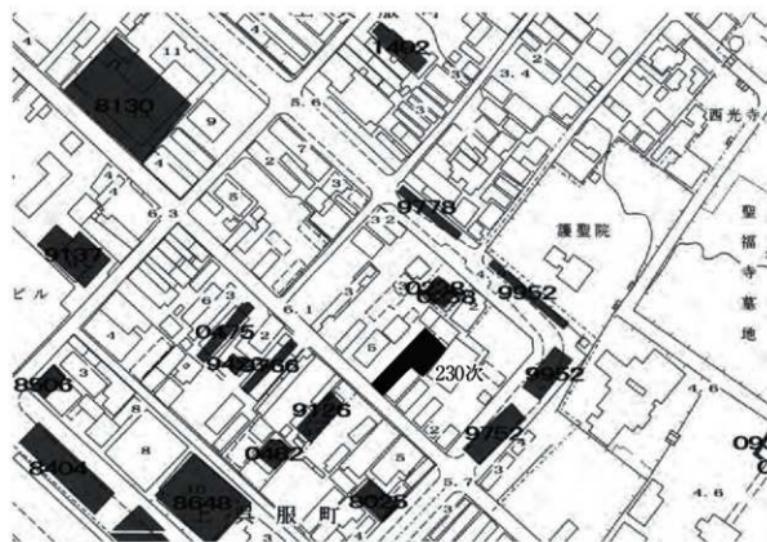
御供所通りを挟んで西に74次・84次・104次・215次、東に102次・120次、北に107次・140次の各調

査地点が位置する。これらの調査では道路跡、礎石や集石といった建物に関わるものなど、中世の街区整備に関わる遺構が検出されており、聖福寺とそれに付属する町屋からなる中世の博多の街の景観をうかがわせる成果が多数上がっている。

- 74次 大庭康時編『博多46』福岡市埋蔵文化財調査報告書第395集 1995
84次 大庭康時編『博多56』福岡市埋蔵文化財調査報告書第521集 1997
104次 本田浩二郎編『博多67』福岡市埋蔵文化財調査報告書第594集 1999
102次・107次・120次 大庭康時編『博多80』福岡市埋蔵文化財調査報告書第706集 2002
140次 井上蘭子編『博多99』福岡市埋蔵文化財調査報告書第808集 2004
215次 朝岡俊也編『博多165』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1371集 2019
本田浩二郎「中世博多の道路と町割り」大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』海鳥社 2008
大庭康時『II 都市の景観』大庭康時『博多の考古学 中世の貿易都市を掘る』高志書院 2019



図1 遺跡の位置 ($S = 1 / 25000$)



9778	107次	9952	120次	9752	102次
9126	74次	0238	140次	9766	104次
9423	84次	8648	35次	8025	9次
0475	149次	0482	151次	8506	26次
9137	76次	8404	築港線3次		

図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)

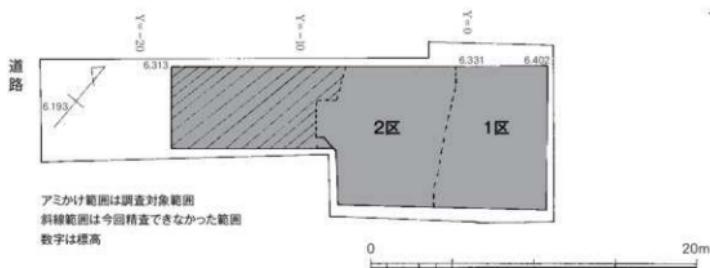


図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の中央から北東寄りに位置する。現地表面の標高6.2~6.4mである。

調査は確認調査の成果に基づき、現地表面下140cmまで重機による表土掘取りを行った後、開始した。敷地は東寄り奥の広い部分と、西寄りの道路に面する幅5mの狭い部分に大きく分かれており、前者から着手した。土留めが掘取り面まであるため、80cm幅の犬走を取って掘り下げた。

まず表土掘取り面全体を清掃したが、攪乱が残存していたため、25cm下げる面を第1面とし、精査を行った。同時に並でトレンチを入れ、下層の堆積状況を確認したところ、表土掘取り面から基盤層である黄褐色砂丘面まで170cmあることが判明した。堆土量の多さ、人力掘削にかかる時間などから、面下げはやむを得ず一部重機を使用し、中世の整地面が確認された第2面以下は人力掘削で行った。また諸般の事情により今回堆土の途中搬出なしの条件により堆土処理が困難となり、3分割調査に切り替えたため、調査区域で未精査部分が生じ、図面上空白・不整合部分が生じてしまった。さらに敷地西寄りの道路に面する間口の狭い部分については、調査期間の制約と作業の安全面から、精査ができなかった。

土層断面の観察によると、表土掘取り面を0として層序は概ね①-70cmまで灰色土、②-90cmまで灰褐色粘質土、③-135cmまで焼土・炭の互層、④-170cmまで暗茶褐色砂質土、⑤-170cmで黄褐色細砂となっており、各層の上面が各時代の生活面とみられる(図4)。②上面を第2面、④上面を第3面、⑤上面を第4面とした。③上面でも遺構検出を行ったが、遺構が明確ではなかったので面としては設定しなかった。②は鎌倉時代後期の整地面、④は古代~中世初頭の遺構面、⑤は基盤の砂丘面である。

出土遺物は中国産陶器、国産陶器、土師器、青銅・石・土製品などコンテナ50箱分である。特筆すべきものとして、クジラまたはイルカの脊椎骨が出土している。遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

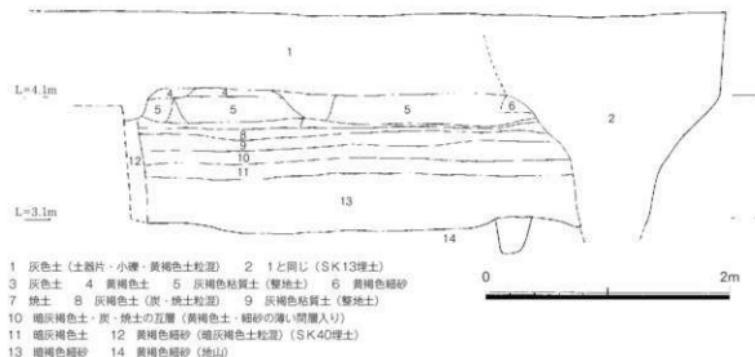


図4 1区北壁土層断面図 (S = 1/40)

2 遺構と遺物

第1面

第1面は表土掘取り面より25cm下げる所で設定した面で、標高4.5~4.6mである。年代は遺構検出時に明錢の永樂通寶（永樂六（1408）年初鑄 図9-53）が出土していること、火鉢・擂鉢片などから15世紀とみられる。

1区

土坑

SK01 (図6、図版1)

0.7×0.55mの楕円形で、深さ0.1mである。銅錢11枚がまとまって出土しており、繙の状態であった可能性がある。

出土遺物 (図9、図版7)

41~51は中国北宋代の銅錢である。41は咸平元寶（咸平元（998）年初鑄）。42~47・50は元豐通寶（元豐元（1078）年初鑄）。43・45は治平元寶（治平元（1064）年初鑄）で、43は篆書体、45は真書体。44は聖宋元寶（建中靖國元（1101）年初鑄）。46は熙寧元寶（熙寧元（1068）年初鑄）。48は紹聖元寶（紹聖元（1094）年初鑄）。49は大觀通寶（大觀元（1107）年初鑄）。51は熙寧元寶か。41・42、44・45、49・50は背面で重なっており、44・45はさらに間に2枚の銅錢を挟んでいる。

SK02 (図6、図版1)

1.6×1.35mの楕円形で、深さ0.6mである。

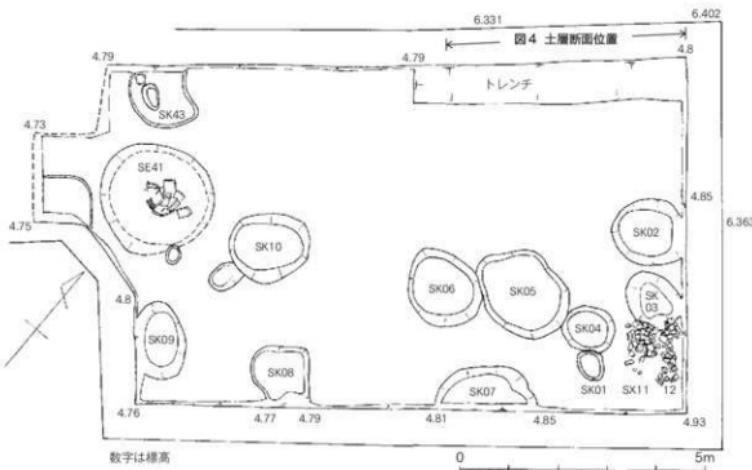


図5 第1面平面図 (S = 1 / 100)

出土遺物（図7・9、図版7）

1は備前焼の甕である。Ⅲ期、13世紀後半～14世紀前半に相当する。55はスタンプ形石製品である。

SK03（図6）

1.3×1.0mの楕円形で、深さ0.5mである。

出土遺物（図7）

2～10は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、4・9は板状圧痕が残る。8は不明の線刻文様がある。56は石球である。砂岩で重さ75.5g。

SK04（図6、図版1）

1.05×0.9mの楕円形で、深さ0.5mである。

SK05（図6、図版2）

1.6×2.0mの楕円形で、深さ0.46mである。

出土遺物（図9）

57は石球である。砂岩で重さ53.5g。

SK06（図6、図版2）

1.75×1.4mの楕円形で、深さ0.39mである。

出土遺物（図7）

11は土師器皿である。底部は回転糸切りで、内面一面に煤が付着している。

SK07（図6、図版2）

径2.1mの円形で、深さ0.3mである。南半は調査区外である。

出土遺物（図7）

12は土師器皿である。底部は回転糸切りである。13は瓦質土器の火鉢である。口縁部内面に巴文のスタンプを施す。14は瓦質土器の捏鉢である。体部内面にハケ目を施し、外面に明瞭な指押さえ痕が残る。

集石遺構

SX11・12（図6、図版2）

東隅で検出した。10～20cm大の礫を二つの群にまとめている。建物の基礎になるかは不明である。

2区

土坑

SK08（図6）

1.2×1.1mの方形で、深さ0.6mである。

出土遺物（図8）

15・16は土師器の皿、17は杯である。底部外面は回転糸切りで、15は板状圧痕が残る。16は内外面に煤が付着し、黒色を呈す。18は青白磁の梅瓶である。外面に明るい青白色の釉がかかり、片切彫りの割花文と桙描を併用して唐草用の文様を施す。内面は灰黄色で露胎である。

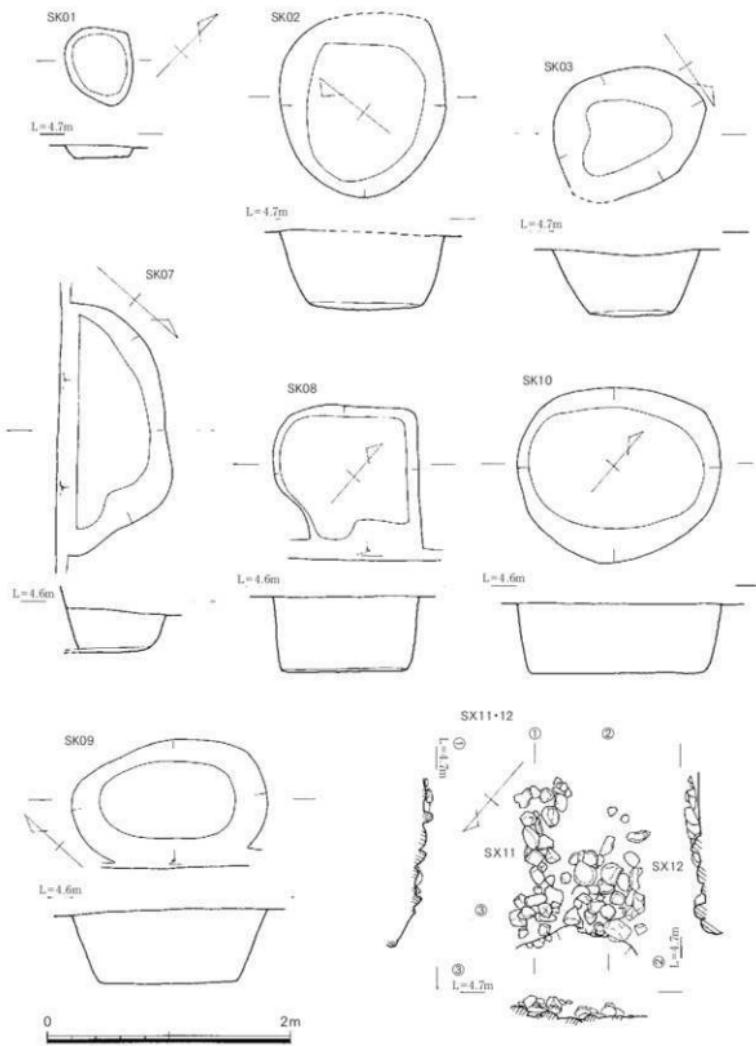


図6 第1面検出遺構実測図 ($S = 1 / 40$)

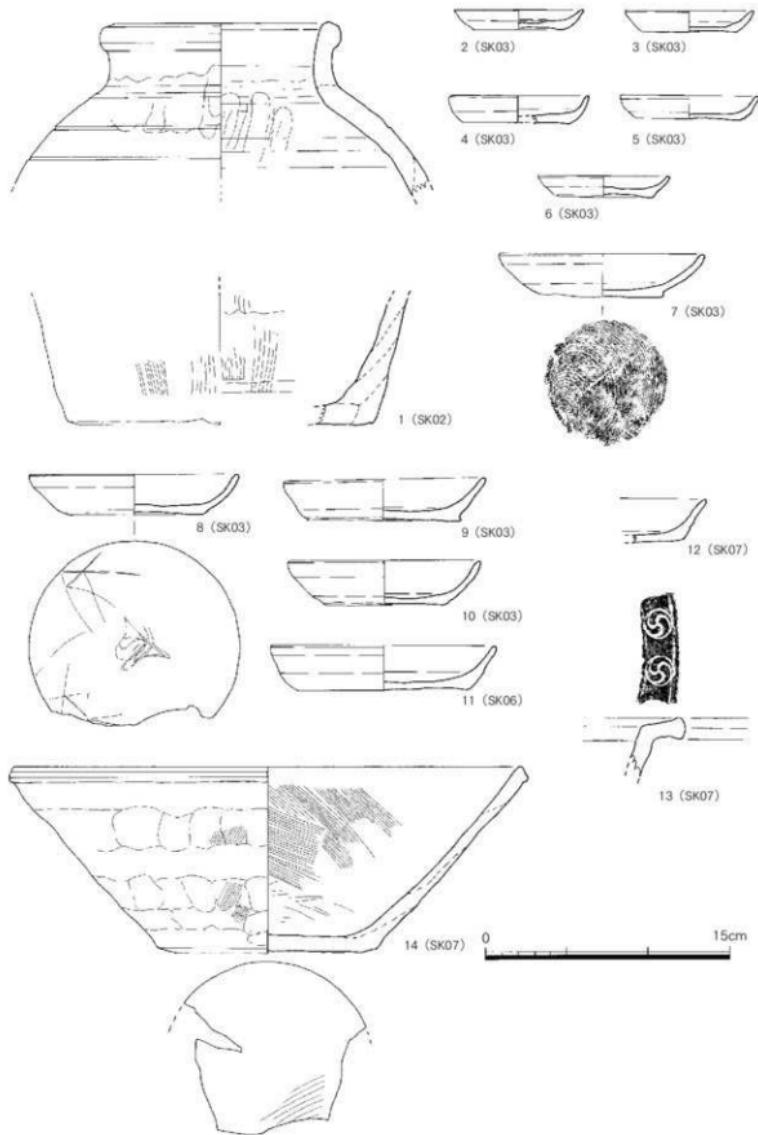


図7 第1面検出遺構出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)

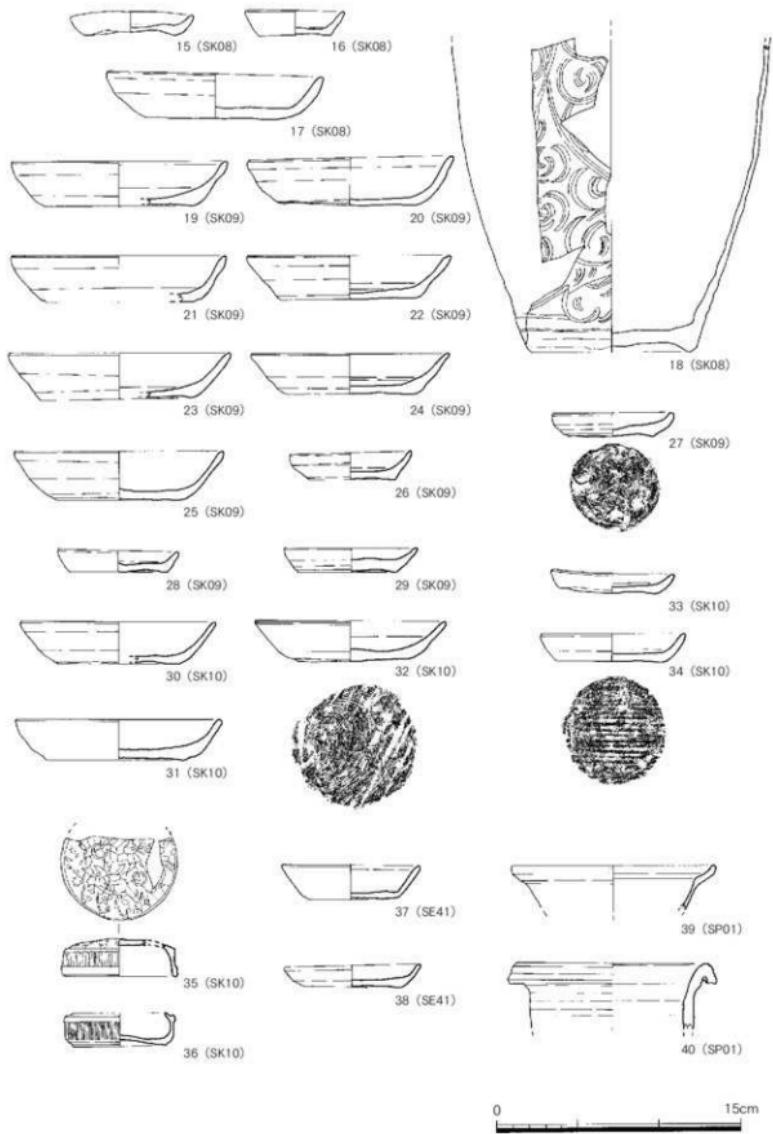


図8 第1面検出遺構出土遺物実測図2 (S = 1/3)

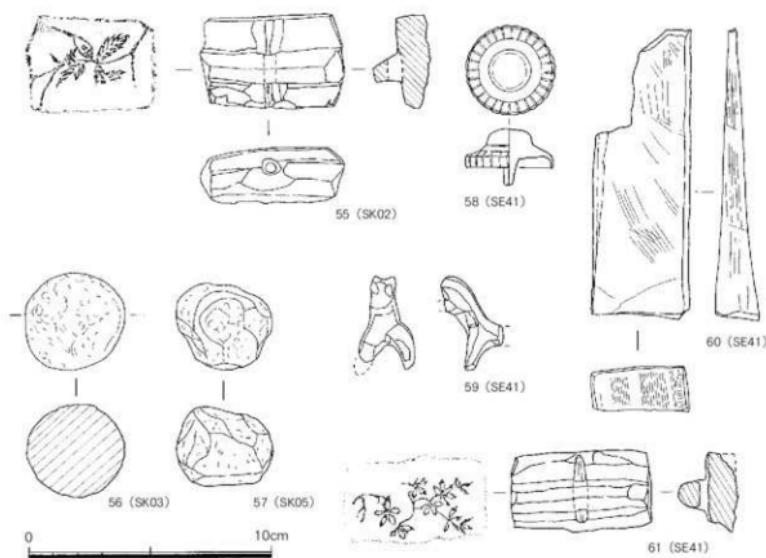
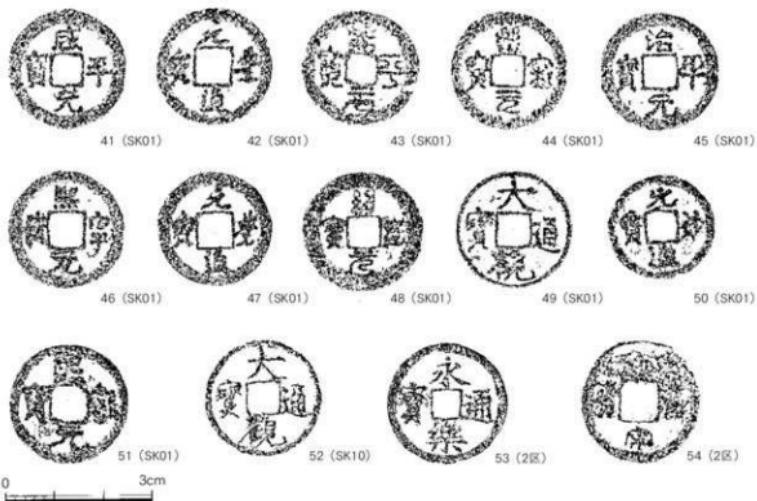


図9 第1面検出遺構出土遺物実測図3（金属・石・土製品）（S=1/2、1/1）

SK09 (図6、図版2)

1.6×1.0mの楕円形で、深さ0.6mである。

出土遺物 (図8)

19~29は土師器で、19~25は杯、26~29は皿である。色調はにぶい黄橙色で、底部外面は回転糸切りである。

SK10 (図6、図版2)

1.7×1.4mの楕円形で、深さ0.6mである。

出土遺物 (図8・9、図版7)

30~32は土師器の杯、33・34は皿である。底部外面は回転糸切りで、31・34は板状压痕が残る。35・36は合子の蓋と身である。35は外面に灰オリーブ色の釉がかかり、花文様は型作りとみられ、貫入が黒く文様状に入る。52は北宋銭の大觀通寶である。

井戸

SE41 (図6、図版2)

径2.3mの円形で、瓦組の井戸側をもつ。掘り込みは砂丘面以下まで達しており、深さ1.6m以上である。

出土遺物 (図8・9、図版7)

37は白磁の皿である。底部外面は灰白色の釉を搔きとっている。38は土師器の皿である。底部外面は回転糸切りである。58は青銅製品で、飾り金具か。刻みを入れて輪花状を呈す。径3.5cm、高さ2.3cm。芯棒は断面四角形である。59は土製品の大形である。60は砥石である。61はスタンプ形石製品である。

第2面

第2面は第1面より50cm下げた所で設定した面で、標高3.9~4.0mである。部分的に厚さ20cm程度の灰褐色粘質土で整地がなされている。その整地層の直下から第3面までは焼土・炭・暗灰褐色土が薄く互層に堆積しており、龍泉窯系鍋蓮弁文碗の出土が顕著である。遺構の出土遺物には口禿の磁器が含まれることから、13世紀後半~14世紀初頭に火災の跡を片付けた後、整地をしたものとみられる。

1区

土坑

SK13 (図、図版3)

2.7m以上×0.7m以上で、整地面を切り、深さは1m以上で砂丘面に達している。調査区の隅にかかるため、安全上完掘はしていない。

出土遺物 (図13・14)

62は合子の蓋である。口縁端部内面は釉の発色が悪く、重ね焼き痕か。84は石球である。砂岩で重さ55.5g。

SK14 (図、図版)

2.8×1.3mの不整楕円形で、深さ0.3mである。

出土遺物（図13・14）

63・64は白磁皿で、いずれも口禿、63は太宰府Ⅸ-1c類である。65は青磁杯で太宰府Ⅲ-2類である。66は陶器の甕である。

SK15（図11、図版3）

1.7×1.18mの楕円形で、深さ0.36mである。

出土遺物（図13）

67・68は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、68は板状圧痕が残る。69は土師器の鍋である。

SK19（図11、図版3）

0.9×1.05mの不整形で、深さ0.45mである。

SK20（図11）

1.85×0.85mの方形で、深さ0.2mである。

出土遺物（図13）

70～72は土師器皿である。底部外面は回転糸切りで、70は板状圧痕が残る。

SK23（図11）

0.95×0.73mの楕円形で、深さ0.6mである。

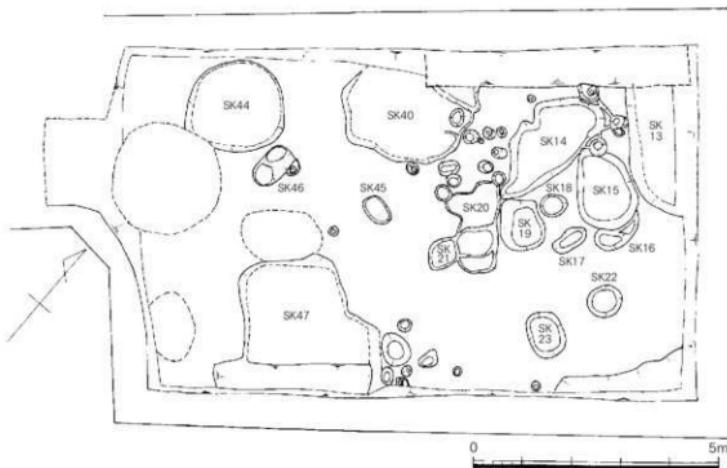


図10 第2面平面図 (S = 1 / 100)

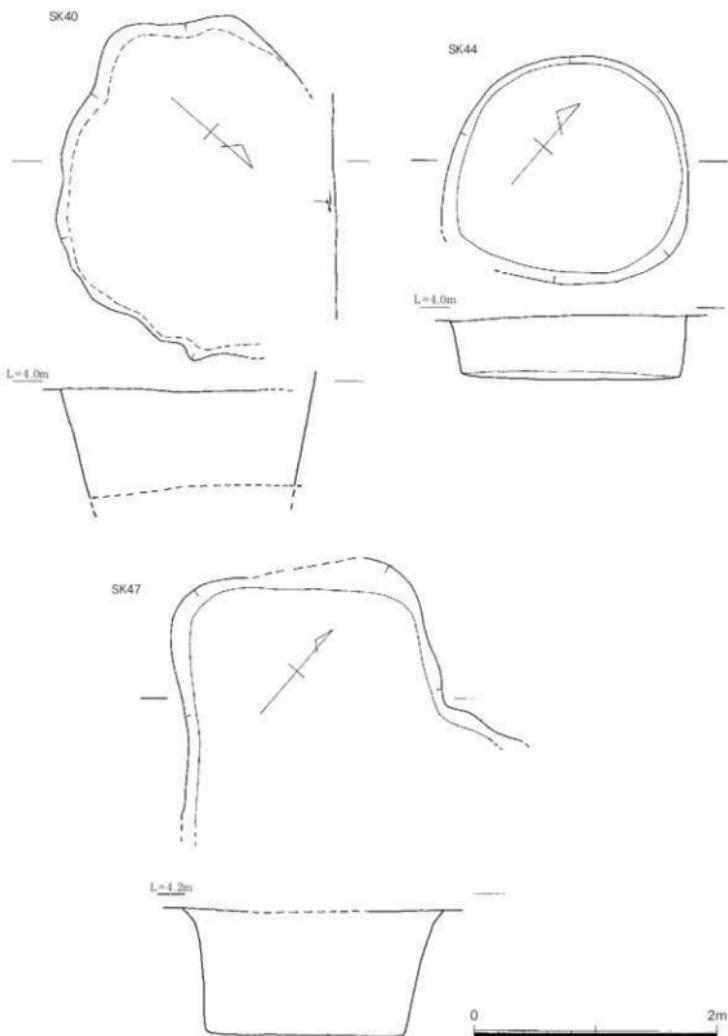


図11 第2面検出遺構実測図 ($S = 1 / 40$)

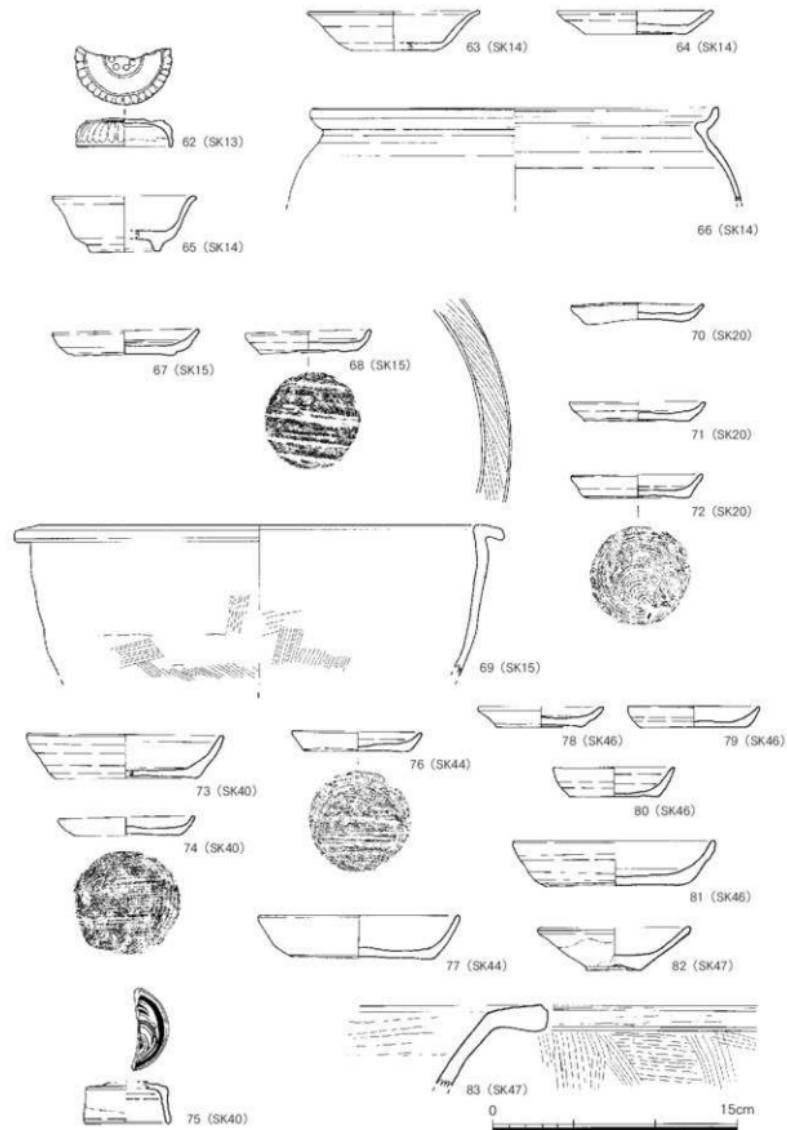


図12 第2面検出遺構出土遺物実測図1 (S = 1 / 3)

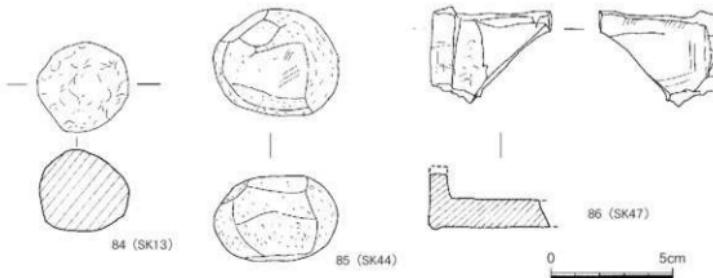


図13 第2面検出遺構出土遺物実測図2（石製品）（S=1／2）

SK40（図11、図版3）

調査区北壁際で1区と2区にまたがって検出した。径2.65mの円形で、深さ1.5m以上である。作業の安全上完掘していない。検出面から20cm程度下でクジラまたはイルカの脊椎骨が計14点、円形にまとまって出土した。この他にも3点出土しており、計17点である。

出土遺物（図13、図版8）

73・74は土師器の杯・皿である。底部外面は回転糸切りで、74は板状圧痕が残る。75は青白磁合子の蓋である。天井部外面に陽刻文がある。155～161はクジラまたはイルカの椎骨である。

2区

土坑

SK44（図11、図版4）

径1.9mの円形で、深さ0.5m弱である。

出土遺物（図13・14）

76・77は土師器の皿・杯である。底部外面は回転糸切りで、76は板状圧痕が残る。77は口縁部、体部と底部の境付近に煤が付着している。85は石球である。砂岩で重さ102.5g。

SK46（図10）

0.9×0.55mの楕円形で、深さ0.2mである。

出土遺物（図13）

78～80は土師器の皿、81は杯である。底部外面は回転糸切りである。

SK47（図11、図版5）

1.1×1.1m以上の隅丸方形で、深さ1.0mである。

出土遺物（図13・14）

82は褐釉陶器の小皿である。口縁部外面から底部内面に暗褐色の鉄釉がかかり、体部下半から底部外面は露胎である。底部外面に重ね焼き用の粘土塊が付着する。83は土師器の大鉢または甕である。体部外面にハケ目を施す。86は石硯の小片である。摩滅痕から両面使用か。

第3面

第3面は第2面より60cm下、整地層および焼土層を除去した面で、標高3.3~3.5mである。基盤層の砂丘面より1層上の暗茶褐色砂質土の上面である。博多遺跡群ではこの面で古代~中世初頭の遺構が多数検出される。

1区

土坑

SK28 (図15、図版4)

径1.0mの円形で、深さ0.4mである。SK13に切られる。

出土遺物 (図16)

87は土師器皿である。底部外面は回転糸切りである。

SK29 (図15、図版4)

1.0×0.5mの楕円形で、深さ0.4mである。

出土遺物 (図16・17、図版8)

88は土師器皿である。底部外面は回転糸切りである。89は須恵器杯身である。115は棒状ガラスである。残存長3.5cm、径2.5mmでコバルトブルーを呈す。

SK30 (図15、図版4)

1.0×0.95mの楕円形で、深さ0.8mである。SK35に切られる。

出土遺物 (図16)

90は青磁碗で太宰府I-1-c類。内面見込み部に目跡が2ヶ所残る。91は土師器杯である。

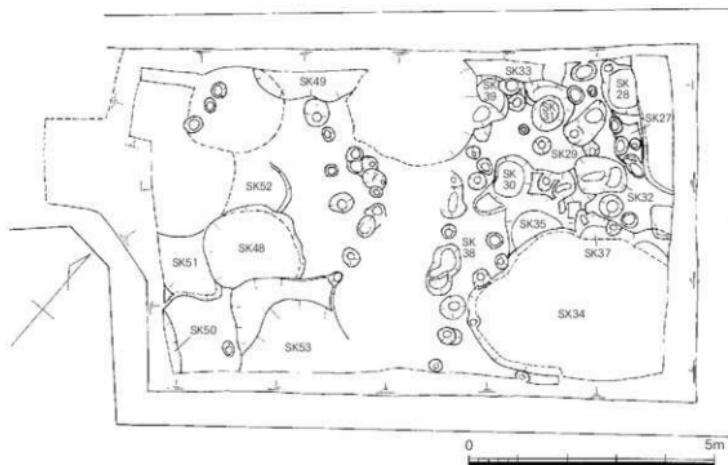


図14 第3面平面図 (S = 1 / 100)

SK31 (図15、図版6)

径0.7mの円形で、深さ0.35mである。SK33を切る。

出土遺物 (図16、図版7)

92は中国産陶器の鉢である。復元口径19.4cm、器高9.2cm。無釉でにぶい橙色を呈す。

SK32 (図15、図版4)

1.1×0.8mの不整方形で、深さ0.7mである。

出土遺物 (図16・17)

93は白磁碗である。94・95は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗である。106は用途不明の滑石製品である。

SK33 (図14、図版6)

1.1×0.8mの楕円形で、深さ0.6m弱である。SK31に切られる。

SK35 (図14、図版4)

径1.1mの円形で、深さ0.9m弱である。SX34に切られる。

出土遺物 (図16・17)

97は土器盤である。底部外面は回転糸切りである。111・112は石球である。

SK36 (図14)

0.95×0.4mの楕円形で、深さ0.5mである。

出土遺物 (図16・17)

98は須恵器蓋のつまみである。99は白磁碗で、太宰府VI-1 b類。底部外面に入偏とみられる漢字墨書きがある。

SK38 (図14)

1.05×0.55mの楕円形で、深さ0.4m弱である。

出土遺物 (図16)

100は須恵器杯蓋である。復元口径10.6cm、器高3.7cm。

SK39 (図14、図版5)

径1.0mの円形で、深さ0.3mである。SK40に切られる。

不明遺構

SX34 (図14、図版5)

1区東隅で検出した。径3~4m以上の円形で、調査区外に広がる。SK35を切る。プランは第3面で明確に捉えられたが、土層断面観察によると、第2面の整地面から掘り込まれている。第3面から深さ0.4mまで掘り下げた後、一部さらに0.6m掘り下げたが、砂丘面に達しなかった。深さは第2面からの通しで1.65m以上となる。井戸の可能性を考え、井戸側の検出に努めたが検出できず、性格を明らかにできなかった。作業の安全上、完掘しなかった。

出土遺物（図16・17、図版8）

96は黒色土器A類椀である。底部外面に墨書がある。110は土製品の人形である。残存高6.0cm。116は棒状ガラスである。スカイブルーを呈し、残存長1.8cm、径2mm。107～109は石球である。

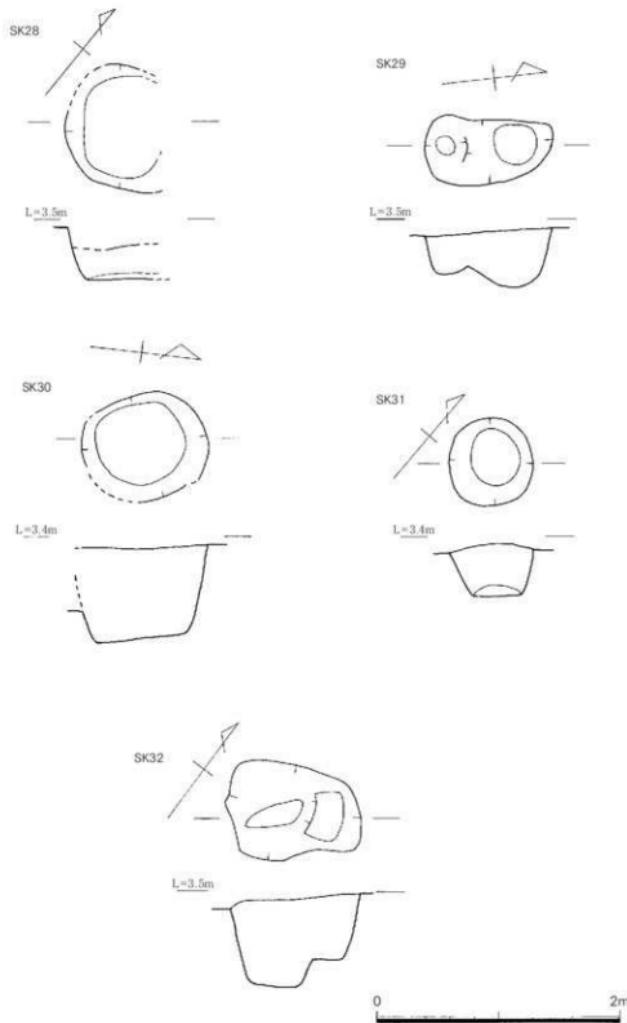
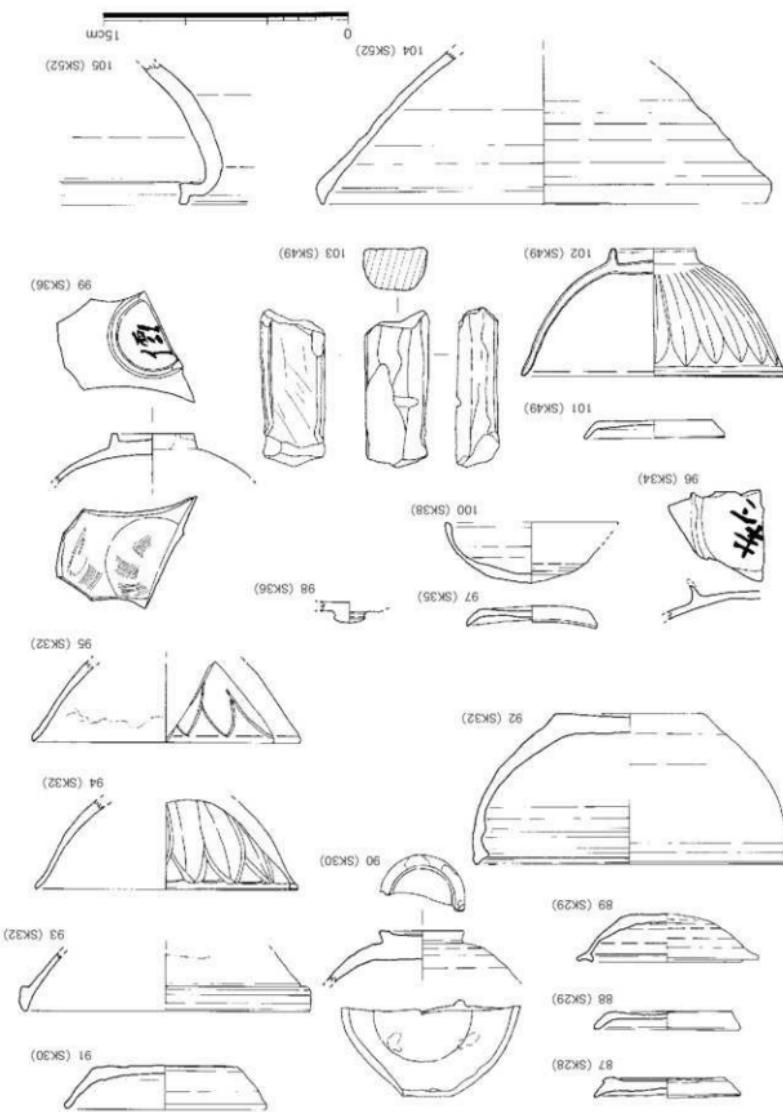


図15 第3面検出遺構実測図 (S = 1 / 40)

圖16 第3面檢出遺物出土實物圖1 (S = 1 / 3)



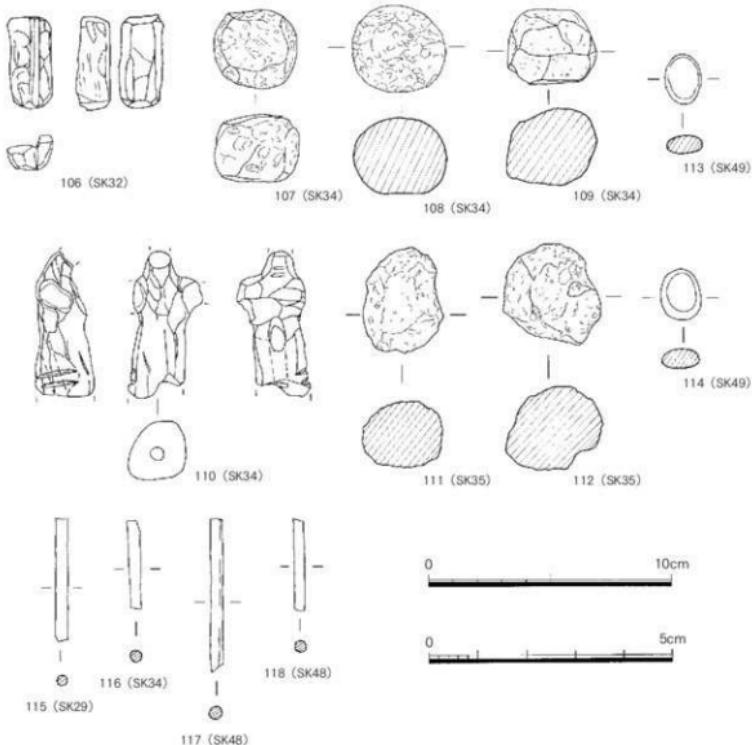


図17 第3面検出遺構出土実測図2 (ガラス・石・土製品) ($S = 1/2, 1/1$)

2区

土坑

SK48 (図14、図版5)

径1.9mの円形で、深さ0.4m強である。SK47に切られ、SK51・52を切る。

出土遺物 (図17、図版8)

117・118は棒状ガラスである。117はやや暗い藍色で残存長3.1cm、径2.5mm。118は灰白色で残存長1.9cm、径2.0mm。

SK49 (図14、図版5)

径2.1m以上の円形で、深さ1.0mである。SK40に切られる。

出土遺物 (図16・17、図版7)

101は瓦器皿である。底部外面は回転糸切りの後なでを施す。102は龍泉窯系鎧蓮弁文青磁碗で、太

宰府II-b類である。103は土師器の支脚である。残存長9.6cm、幅3.9cm。一部煤が付着し、赤く焼けている。113・114は墓石で、113は黒石、114は白石である。

SK50 (図14、図版5)

2区南隅で検出しており、全形は不明である。検出面からの深さ0.1mであるが、土層断面の観察によると第2面からの掘り込みとみられる。

SK51 (図14、図版5)

S E41・SK48に切られ、全形は不明である。次の第4面を掘り込んでいないため、深さ0.6m以内である。

SK52 (図、図版)

S E41・SK48に切られ、不分明であるが、径0.65mの円形に復元できる。深さ0.1mである。
出土遺物 (図16)

104は中世須恵器の捏鉢である。復元口径27.8cm、残存高9.3cm。105は常滑焼の壺である。

第4面

第4面は第3面より40cm下、基盤層の黄褐色細砂層上面で、標高3.0mである。上層から掘り込まれた遺構がほとんどで、新たに検出した遺構はわずかである。

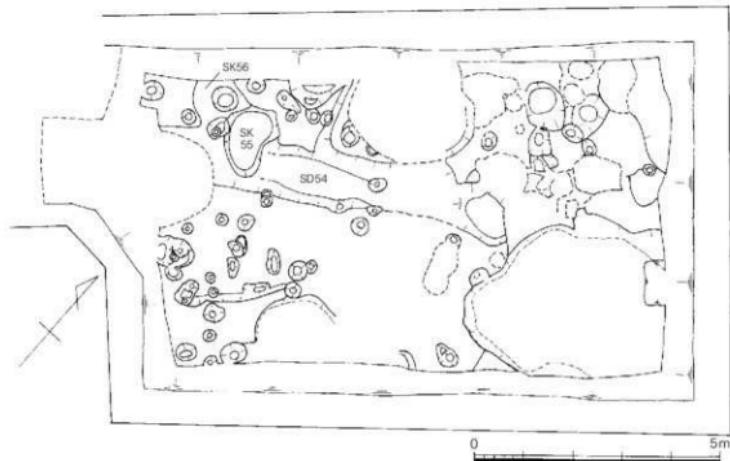


図18 第4面平面図 (S = 1/100)

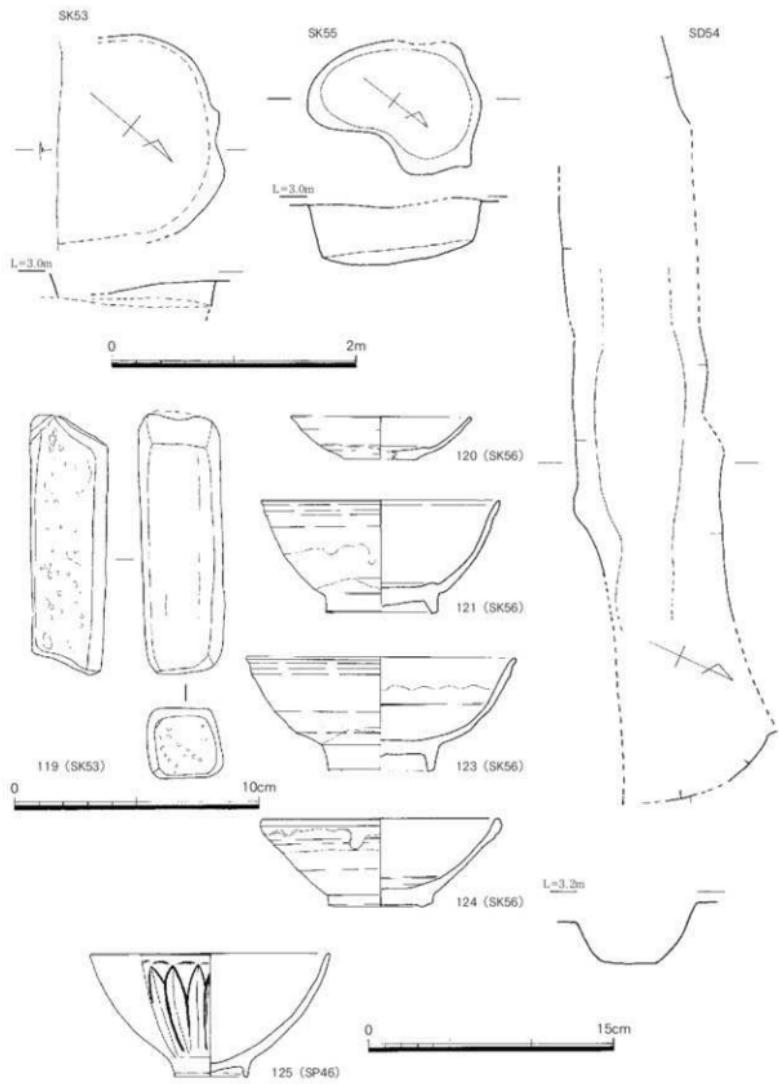


図19 第4面検出遺構および出土遺物実測図 ($S = 1/40, 1/3, 1/2$)

溝

SD54 (図19、図版6)

1区精査時には東端が検出されたのみで、溝と認識できなかったが、2区精査の結果、東西方向の溝であることが判明した。検出長7.3m、幅1.0m、深さ0.3mである。西端はSK55・56、SE41に切られ、さらに未掘域に延びる。東端についても、大型土坑など上層からの掘り込みがいくつもあり、分かりにくいが、調査区外に延びる可能性もある。埋土が暗茶褐色細砂で、本調査での最古の遺構であろう。

土坑

SK53 (図19、図版6)

径1.7mの円形で、深さ0.2m以上である。調査区南壁にかかっており、完掘していない。

出土遺物 (図19)

119は砾石か。残存長10.6cm、幅3.4cm。一部に焼けた煤が付着している。

SK55 (図19、図版6)

SD54を切る。1.4×1.1mの不整楕円形で、深さ0.5mである。

SK56 (図18)

SK55に切られる。調査期間の制約上完掘できなかったが、径1mの円形で深さ0.3m以上とみられる。

出土遺物 (図19)

120～123は白磁で、120は皿で太宰府VI-1b類、121～123は椀で、121は太宰府V-1a類、122は太宰府IV-1a類である。

SP出土遺物 (図19)

124は龍泉窯系鏡蓮弁文椀である。SP46出土。

包含層出土遺物 (図20～22、図版8)

鉢取面-25cm (図20)

125～129は瓦質土器の火鉢である。口縁部および体部外面に型押しの菊花文、斜格子文、雷文などを施す。130～132は壇堀で、内面に緑色のガラス質が付着している。133は陶器の蓋である。外面は明橙色、内面は暗褐色を呈し、受部から内面に煤が付着している。天井部に線刻がある。龍か。134は巴文軒丸瓦である。135は土鈴である。内部に1cm大的の玉が残存している。

2～3面 (図21・22)

136・137は龍泉窯系鏡蓮弁文青磁碗で、太宰府II-b類である。136は底部内面に花文、137は底部外面に「十」とみられる墨書がある。138は青白磁合子の身である。復元口径5.6cm、器高2.5cm。平面輪花形で体部外面上半には花文の型押しを施し、下半には鉄錆の塗布によるものか赤く発色している。139は陶器の捏鉢である。復元口径25.0cm、器高10.3cm。粘土紐の巻き上げ成形で、体部外面に指印えと粗い縱方向のハケ目、体部内面に横方向のハケ目を施す。140は白磁皿で、太宰府VII-

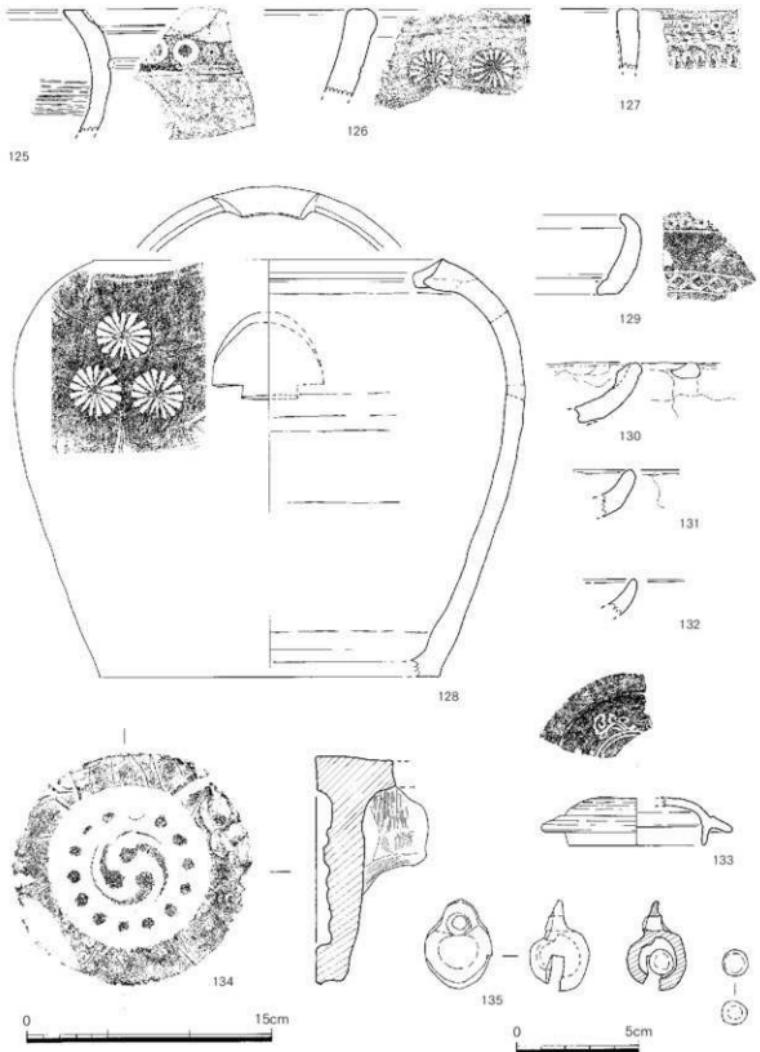


図20 包含層出土遺物実測図1 ($S = 1/3, 1/2$)

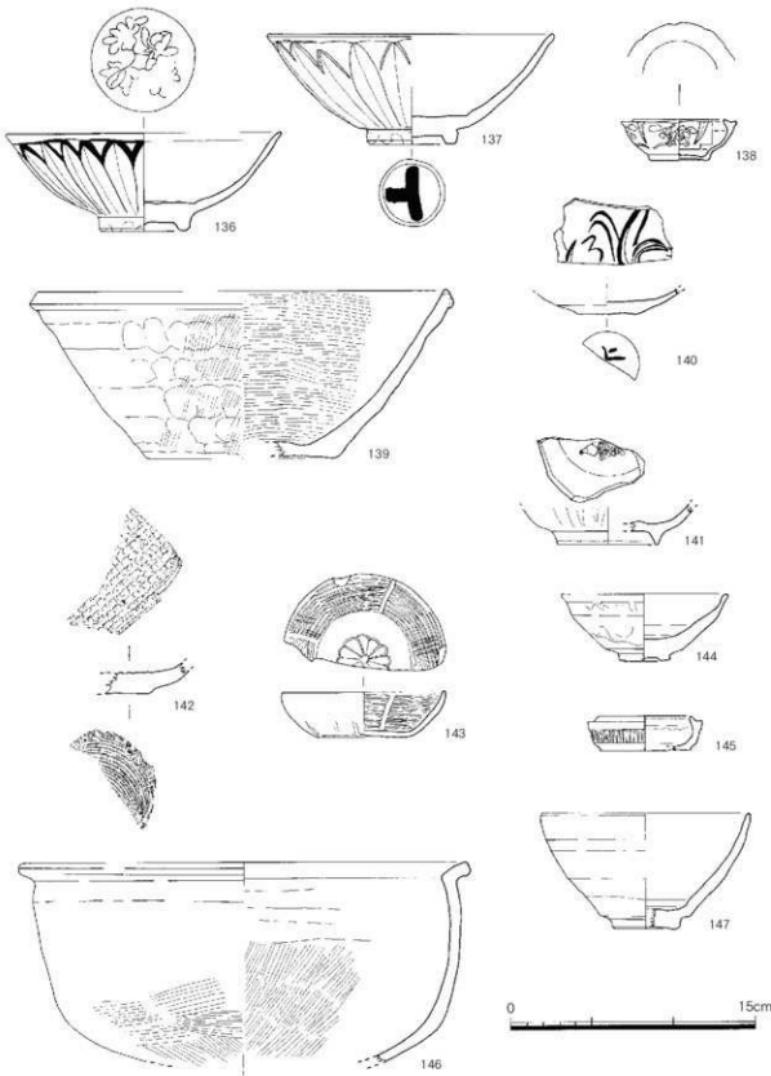


图21 包含层出土遗物实测图2 (S = 1/3)

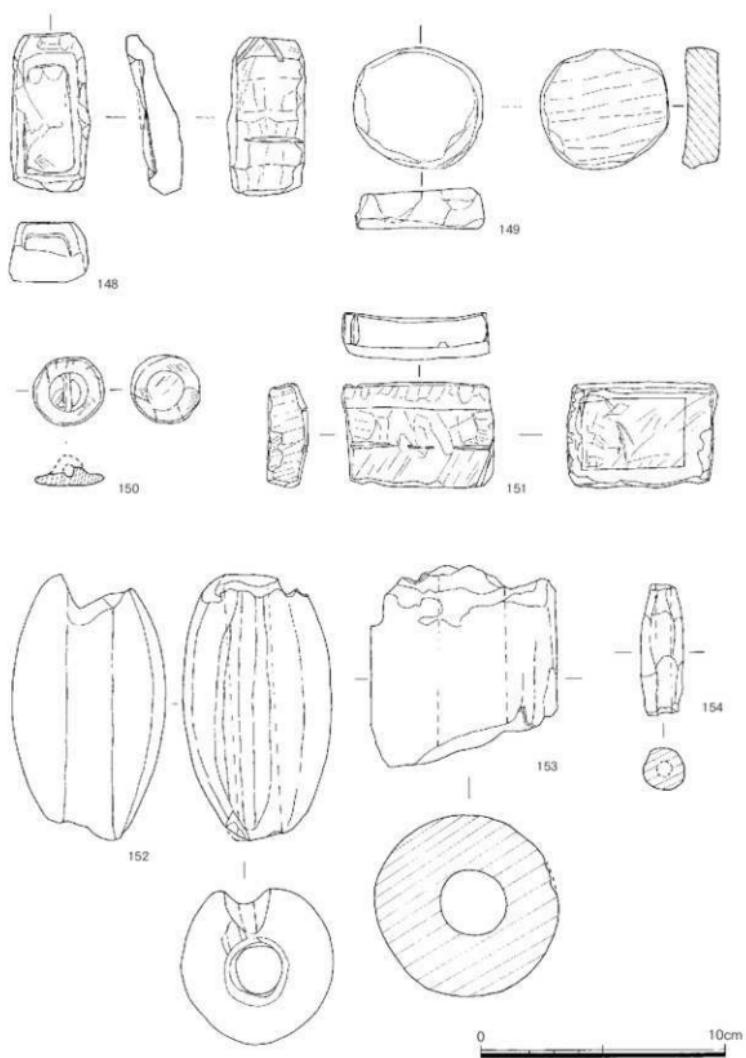


図22 包含層出土遺物実測図3 (石製品・土製品) ($S = 1/2$)

1 b 類である。底部外面に「上」とみられる墨書がある。141は龍泉窯系青磁杯で、太宰府 II - 4 b 類である。底部内面に双魚の貼付文を施す。142は瀬戸焼の鉢皿である。復元口径14.2cm、器高2.9cm。底部外面は回転糸切りで露胎、その他は明オリーブ灰色の釉がかかる。143は瓦器の小鉢である。復元口径10.0cm、器高2.8cmで、暗青灰色を呈す。底部内面に菊花の暗文、体部内面に横方向の細いヘラミガキを暗文状に施し、施文の分割線として縦方向のなで消しがある。144・147は天目椀である。144は復元口径10.2cm、器高4.1cm。

147は復元口径12.6cm、器高7.1cm。いずれも体部外面上半から内面に黒褐色の釉をかける。145は磁器の合子身である。口径5.6cm、器高2.1cm、受部径7.0cm。146は土師器の鍋である。復元口径27.6cm、残存高12.3cm。体部外面上半にハケ目を施し、体部外面には煤が厚く付着している。

148は滑石製舟形である。長さ6.6cm、幅3.2cm。片面に 5.0×2.2 cmの長方形に割り込みをしている。表面が黒くなっている、火を受けている可能性がある。149は瓦玉である。 5.3×4.9 cmの円形で、瓦質土器を転用している。150は滑石製蓋か。径2.8cmで、復元径1.6cmのつまみがあったとみられるが欠損している。151は用途不明の滑石製品である。長さ6.2cm、幅4.3cm。片面の中央に幅1.5cm幅で突帯を削り取っており、もう一方の面には 4.3×2.9 cmの長方形に割り込みをしている。152は有溝土錘である。残存長10.9cm、幅6.3cm、孔径1.9cm、重さ340.5g。153はふいごの羽口である。残存長8.3cm、幅7.6cm、孔径2.8cmで、孔内面は赤、断面は黒く焼けており、ガラス質が付着している。

154は土錘である。長さ5.4cm、厚さ1.7cm、孔径0.6cm。

3まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ながらまとめておきたい。計4面の調査を行い、近世から古代までの遺構・遺物を確認した。

第1面は瓦質土器の出土などから15世紀以降とみられる。SK01では中国銅錢がまとまって出土しており、紙の状態で埋納されていた可能性がある。石の集積がみられたので建物基礎の可能性もあるが、他に関連する遺構は確認できなかった。

第2面は口禿の磁器の出土から13世紀末～14世紀前半とみられる。部分的ではあるが整地面が形成されている。土坑など深い遺構が掘り込まれており、特にSK40ではクジラまたはイルカの脊椎骨が円形にまとまって出土した。食用に供されたものとみられる。今回の調査地点とは御供所通りを挟んで西に位置する74次調査では、東西方向の道路跡が検出されているが、今回の調査地点では検出されなかった。恐らく現在駐車場となっている北西側隣接地内を通るものとみられる。

第2面の整地土の下には、焼土・炭を含む土が堆積しており、龍泉窯系鎬運弁文青磁碗が出土することから、13世紀前半を上限、同末を下限とする火災に関わる層とみられる。

第3面は白磁・青磁の型式から12世紀、平安時代末期とみられる。第3面～第4面までの暗茶褐色砂層は出土遺物から古代以前の遺物包含層とみられる。この土層の下、第4面で検出したSD54が遺構の切り合い・覆土から最古の遺構とみられ、古代以前とみられる。今回精査できなかった西寄りの狭小部分にも延びていくものとみられる。

出土遺物の中では、7～8世紀代の須恵器蓋杯がわずかながらみられることから、近辺における当時期の遺構の存在が推測される。

様々な条件により、調査に不十分な点のあったことも否めないが、一定の成果を挙げられたものと考える。周囲における今後の調査によって、課題が解決されることを期待したい。

図版 1



2区北壁土層断面（南東から）



1区北壁土層断面（南東から）



1区東壁土層断面（南西から）



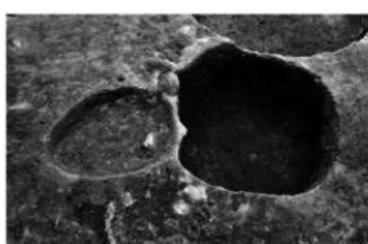
1区南壁土層断面（北西から）



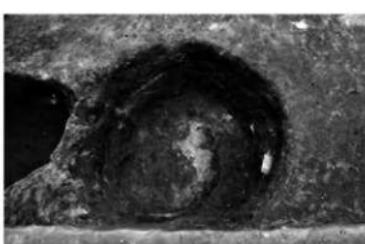
1区第1面全景（北から）



2区第1面全景（南西から）



SK01・04（北東から）

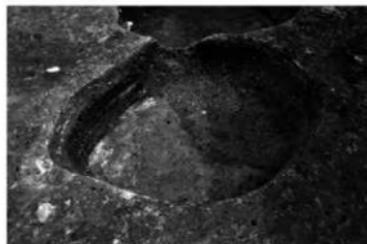


SK02（北東から）

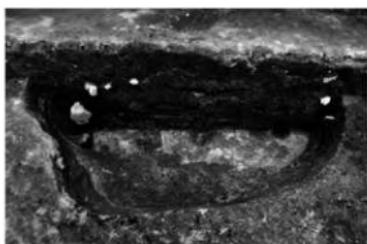
図版2



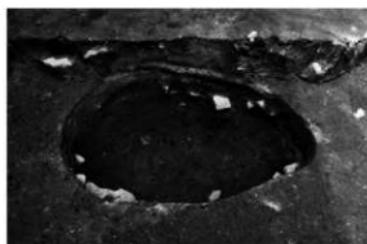
SK 05 (南東から)



SK 06 (南西から)



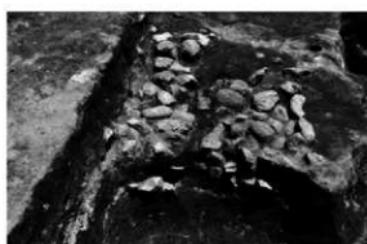
SK 07 (北西から)



SK 09 (北東から)



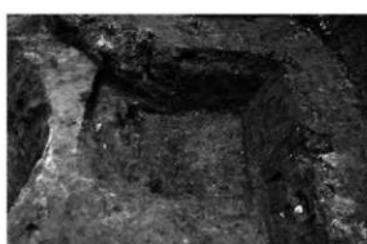
SK 10 (南東から)



SX 11・12 (北西から)



SE 41 (南西から)



SK 42 (北西から)

図版3



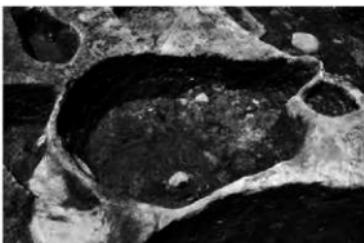
1区第2面全景（北から）



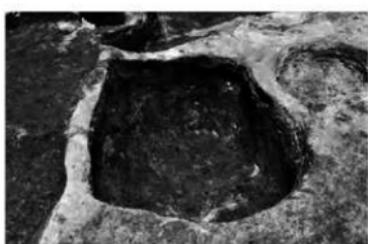
2区第2面全景（北から）



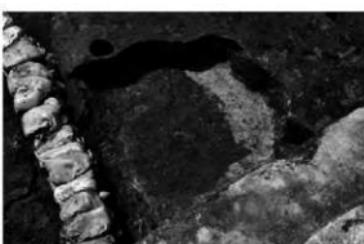
SK 13（西から）



SK 15（北東から）



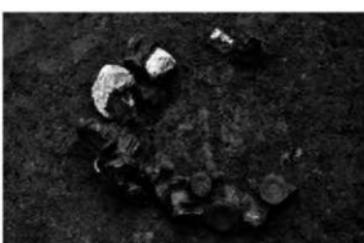
SK 19（南東から）



SK 40（北から）

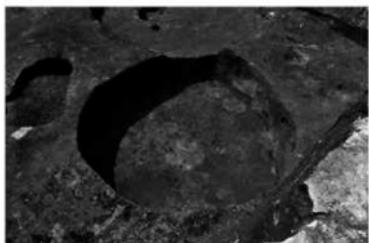


SK 40骨出土状況（北西から）



同左（北東から）

図版4



SK 44 (北から)



1区第2面下 青磁碗出土状況 (北西から)



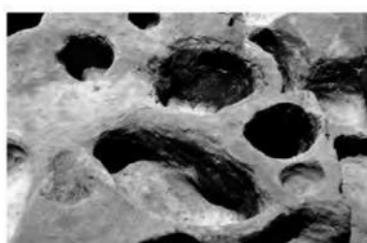
1区第3面全景 (北から)



2区第3面全景 (北から)



SK 28 (北東から)



SK 29 (北東から)



SK 30・35 (南西から)



SK 32 (北東から)

図版5



SX 34 (南西から)



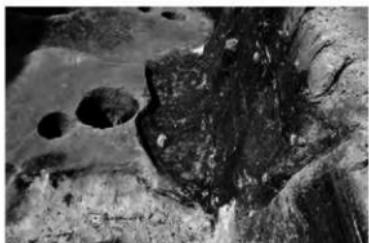
SK 39 (北西から)



SK 47 および下面 SK 53 検出状況 (南西から)



SK 48 (南西から)



SK 49 (北東から)



同左 完掘状況



SK 50 (東から)



SK 51 (南西から)

図版6



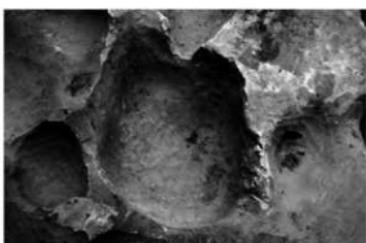
1区第4面全景（北から）



2区第4面全景（北から）



SK31（北西から）



SK33（北西から）



SK53（北東から）

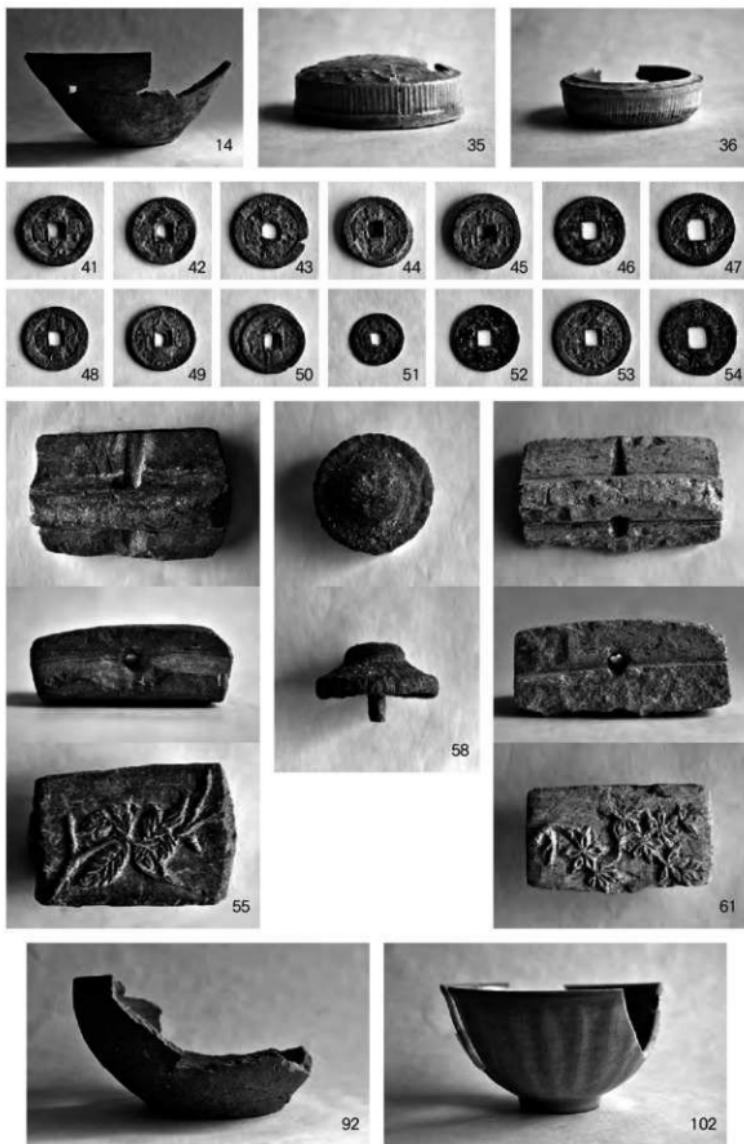


SK55（北西から）



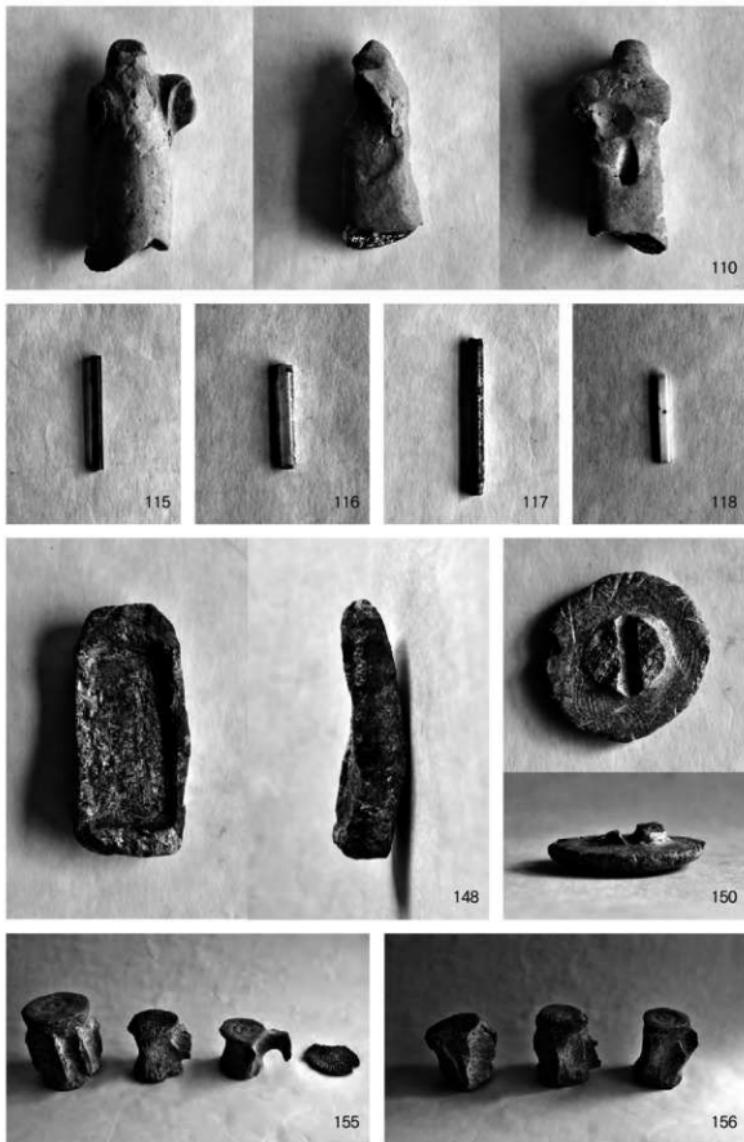
SD54（南西から）

図版7



出土遺物 1

図版8



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	はかた						
書名	博多177						
副書名	博多遺跡群第230次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	第1420集						
編著者名	木下博文						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	2021年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群 第230次	ふくおかしはかたくかみこみくまち 福岡市博多区上呉服町 170, 171	40132	33度 35分 50.43秒	130度 24分 44.88秒	20190522 ～ 20190810	100	記録 保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群	集落跡	弥生～中世	土坑、井戸、溝、 ピット	中国產陶磁器、銅 錢、滑石製品、須 恵器、土師器、動 物骨			
要約	博多遺跡群は、博多湾に面した3列の東西方向の砂丘上に立地する。今回の調査地点は、遺跡の中央北寄りに位置し、内陸の砂丘の北東部にあたる。聖福寺の寺中町の範囲内である。近隣で140次、107次、74次調査が実施され、13世紀末～14世紀初の道路、12世紀前半の経塚などが検出されている。今回の調査では計4面の調査をし、中世期の柱穴・土坑・井戸・溝などを検出した。標高4.0mにあたる第2面では、灰褐色土による整地層を確認し、それ以下の層では13世紀前半の青磁碗が出土していることから、整地の年代が13世紀後半であることが判明した。第2面で検出した土坑からはクジラまたはイルカの椎骨がまとまって出土している。						

博多177

- 博多遺跡群第230次調査報告 -
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1420集

令和3（2021）年3月25日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 魚住印刷
〒812-0033 福岡市博多区大博町8-20

